

反意的 *On*: 概念構造における付加詞類の一分析*

井上 和子

0. はじめに

英語の付加詞 (adjunct) の中には、反意的効果 (adversative effect) を意味する (1) におけるような *on* の用法がある：

- (1) a. John's car broke down *on him*.
 b. John's savings were wiped out *on him*.

本稿では、この *On*-NP の概念構造に関しての一分析を提案し、それが他の付加詞の構文の表示にも一般化できる点があることを示そうとするものである。

まず、§1 においては、ここでの議論の基になっている意味理論の枠組について、簡単に概略する。§2 においては、(1) のような反意的付加詞 *on* をもつ文が、概念構造において (2) の a, b のような表示をもつことを論ずる。

- (2) a. [Event INCH([State BE([Event JOHN_i'S CAR BREAK DOWN],
 [Place ON([Thing JOHN_i]))]])]
 b. [Event INCH([State BE([Event JOHN_i'S SAVINGS BE WIPED
 OUT], [Place ON([Thing JOHN_i]))]])]

とりわけ、(1) の各文とほぼ同義的であるとされる経験を表わす (3) のような *have* 構文との関係について明らかにする。

- (3) a. John had his car break down.
 b. John had his savings wiped out.

§3 では、§2 でのこの *on* の分析が、場所、時間、結果を表わす付加詞など

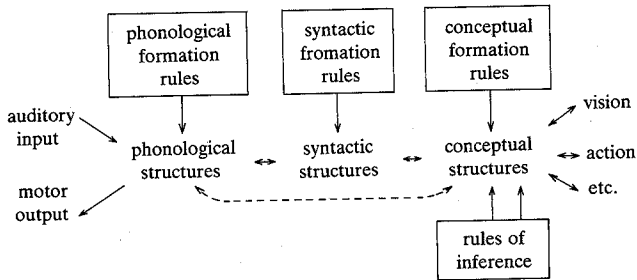
他の副詞類にも拡張できることを示す。最後に、§4では、本稿の分析の理論的意味合いについて述べる。

1. 意味理論の枠組み

本稿が採用している意味理論は、その概要において Jackendoff (1976, 1983, 1990) の理論を基盤としている。すなわち、以下の点においては、共通のものである：

- (i) 意味表示扱う概念構造がその一部を成す文法全体は、(4)のように示される。

(4)



(Jackendoff (1990: 16))

すなわち、音韻構造、統語構造、概念構造は、それぞれ自立的なレベルであり、レベル同士は *correspondence rules* により結びつけられる。

- (ii) すべてではないにしても、殆どの(もしくは非常に多くの)語の意味は意味素性に分解できる。また、意味素性には定数(constant)ばかりでなく、関数(function)によって表わされるものがある。(e.g. John loves Mary=LOVE([JOHN], [MARY]))
- (iii) 意味表示の基本構造は場所的關係により記述できる。これは、Gruber (1965) 等の場所理論の流れを汲む考え方であり、筆者においても Inoue (1975) 以来唱えてきた見方である。基本構造を構成するパター

ンとしては少なくとも次のようなものがあると考える。

- a. Stative: [BE([X], [Y])]
- b. Change of State: ①[GO([X], [TO([Y])])]
②[INCH([BE([X], [Y])])]
- c. Causative: [CAUSE([Z], [E])]

BE, GO, INCH, CAUSE など大文字で表わしているのは、意味素性であり、X, Y, Z, E は変項で、X は Gruber (1965), Jackendoff (1973) の意味での Theme, Y は Location, Z は Causer, E は Event を表わす。a は状態動詞、b の二つのパターンは状態変化動詞の構文、c は使役動詞の構文の意味表示の枠組みとなる。状態変化動詞の構文に、function GO と INCH の二つのパターンを認めたことは、Jackendoff (1990) におけるこの種の動詞に見られる 2 系列の区別の必要性を採り入れたものである。§ 2 で関連の深い INCH とは、INCHOATIVE の略で、State を唯一の項としてとり、その State で終結する Event を派生させる関数である。

以上の (i)–(iii) に対し、以下の点に関しては、Jackendoff とは意見を異にしている：

- (iv) Thematic Relations を扱う ‘Thematic tier’ とは別個に、Jackendoff (1990) では、Actor-Patient の概念を扱う ‘Action tier’ を設けている。これらの概念を識別するものとして、(5) のようなテストを挙げている：

- (5) a. What happened to Y was ...
- b. What X did to/for/with Y was ...

(5a, b) における Y が Patient であり、(5b) における X が Actor であるとされる。この二つの概念に関する議論は別の所に譲らなければならないが、(5) のテストによって捉えられるはずの概念は不明確であり、決して安定したものとは言えない。例えば、(6) の a, b の ‘rifle’, ‘razor’ は通常の Actor, Patient とは言えない。

(6) a. What the rifle did was shoot him.

b. What Bill did to his razor was shave with it.

また、それに加えて‘Action tier’を採用しない理由は、‘Thematic tier’との区別が本稿の反意的付加詞 *on* の議論に、本質的な関わりをもっているわけではないからである。

2. 反意的 *On* について

(1a, b) のような反意的 *on* をもつ文の概念構造が(2a, b) のように表示される論拠には、以下の三点がある。

まず第一点は、*on* の属する関数が、主動詞を含む節よりも上位の構造にある根拠は、主節の NP と前置詞の目的語の NP との代名詞による照応関係から来ている。次の(7)の文に注目されたい。¹

(7) a. A new thesis problem for John_i was conjured up on him_i.

b. A new thesis problem for him_i was conjured upon John_i.

(Cf. *A new thesis problem for him_i was sent to John_i.)

(7b) で明らかのように、いわゆる逆行代名詞化が、*him* と *John* の間で成り立っている。逆行代名詞化が可能だということは、Langacker (1969) の古典的な説明によれば、統語的には *on John* は *for him* を統御 (command) し、かつ後者によって統御されていないということになる。² すなわち、*for him* の属する主節を支配 (dominate) する別の S-node があり、*on John* の node と主節はその上位の S-node の同節要素ある、ということの意味する。これは、もちろん、即意味的にも同様の関係にある、すなわち *on John* が属する節が *for him* が属する節よりも上位にある、ということを保証するものではない。しかしながら、その逆のケース、すなわち、統語的に異なる扱いをされている二つの節を、意味的には同一の命題に属するものとして扱うべき事例を、筆者は知らない。

二番目の論拠は、(3) のような *have*-構文との関係である。(3) のような経

験の *have* の概念構造は, Inoue (1992)³ を改訂した下の (8) のような構造を想定する:

- (8) a. [_{Event} INCH([_{State} BE([_{Event} JOHN_i'S CAR BREAK DOWN],
[_{Place} AT([_{Thing} JOHN_i]))])])]
b. [_{Event} INCH([_{State} BE([_{Event} JOHN_i'S SAVINGS BE WIPED
OUT], [_{Place} AT([_{Thing} JOHN_i]))])])]

これは, 基本的には, (2) と同じ INCH([BE(_{Event} X), [_{Place} Y]]) の構造である。しかしながら, 次の二点において異なっている: 1) (3) の統語構造と (8) の概念構造を結びつけるのは, (3) の *John* は統語上, 主動詞 *have* の項であるので通常の Argument Fusion の規則であるが, (1) と (2) を結びつけるのには, (1) の *on him* は統語上, 項ではなく付加詞であるので, 後で示すような Adversative *On* Adjunct Rule が必要であるということである; 2) 経験の *have* は必ずしも反意的意味をもつとは限らないので, function BE の二番目の項は Location ではあるが, ON である必要はない。下の (9) の文を見てみよう:

- (9) John had his name included in the list.

(9) の場合, 経験の *have* の読みには, 反意的な意味はない。反意的な意味は経験の *have* の構文が伝えている間接的な受身の一部を成すにすぎない。(8) の構造に関しては, 別の所で十分な論証をする必要があるが, 主たる根拠としては, 以下の二点が挙げられる。まず, Theme が Event であり, 主語の NP が Location である点については, *have* 構文の核である状態動詞の *have* と並行した関係が成り立つことがあげられる。存在・所有の動詞 *have* では, 主語の NP が Location であり, 目的語の NP が Theme である。例えば, (10a) は (10b) のように表示される:

- (10) a. John had the book.
b. [_{State} BE([_{Thing} THE BOOK], [_{Place} AT([_{Thing} JOHN])])]

また (10a) のような文は, 主語の NP と同一指示的な代名詞を前置詞句の目的語としてとりうる:

(11) John_i had the book with *him*_i.

このような同一指示の代名詞は、Theme の存在している場所(Location)を表わしているという点で、主語の NP と同じ意味役割を担っている。これは Jackendoff (1990: 60) において指摘されている通りである。存在の *have* と同様のことは、経験の *have* にも当てはまる。次の(12), (13)の文に注目されたい:

(12) John_i had his car break down on *him*_i.

(13) John_i had his savings wiped out on *him*_i.

(12), (13)においても *him* は主語の NP と同一指示でなければならない。従って、(11)の場合と同様、John は Location の役割を担っているということになる。また、同一指示という点で、経験の *have* と相補的なのが、(1)の adversative *on* の phrase である。(1)のような文では、*on*-phrase の目的語の NP は、決して主語、直接目的語、間接目的語と同一指示になることはない:

(14) a. *John_i fell from the tree on *him*_i.

b. *They kicked *him*_i out on *him*_i.

c. *The bully gave *him*_i a blow on *him*_i.

従って、(1)と(8)の概念構造をともに INCH ([BE ([Event X], [Place Y])]) と仮定するならば、両者の同義性、代名詞による照応現象に関する特徴を捉えられるのみならず、この両者と所有・存在の *have* にまでまたがる一般化を捉えられることになる。⁴

さらにこれを裏付ける第3の論拠は、以下の(15)に示されるように、反意的付加詞 *on* には、繰り返し許されるという特徴がある:

(15) A guy dropped dead on them on us (and now we have to send them a replacement).⁵

これは(2)のように概念構造において主動詞より上位に述語をとりうる構造においてのみ成り立つことである。道具や手段の付加詞、利益を表わす付加詞などでは、繰り返しはできない:

(16) *John killed Bill with a gun with a knife.

(17) *John traveled by plane by bus.

(18) *John sang a song for joy for money.

また(15)に対応した経験の *have* でも繰り返しが可能だということは、ここでの主張を一層強めるものである：

(19) We had them have a guy drop dead on them on us.⁶

さて、以上論じてきたように、(1)の文が(3)ときわめて類似した形で表示されるべきであるとの本稿の主張が妥当なものであるとすると、次の二つの点で Jackendoff (1983, 90) の理論に変更を迫るものである。第一点は、修飾構造 (modification structure) についてである。Jackendoff は例えば (20a) のような文の副詞句 'quickly' は、Restrictive Modifier Rule により b のように表示されるとしている：

(20) a. John went home quickly.

b.
$$\left[\begin{array}{l} \text{GO}([\text{Thing JOHN}], [\text{Path TO}([\text{Place HOME}])]) \\ \text{Event } [\text{Property/Manner QUICK}] \end{array} \right]$$

これは制限的修飾構造すべてにあてはまるとしている。すなわち、ここでは主要部 (Head) の語彙的概念構造 (LCS) それ自体がメインの項構造 (Argument Structure) と従属的な修飾構造の二重構造になっている。しかし反意的付加詞 *on* に関して(2)のような構造が成り立つとすれば、修飾構造は二重構造ではなく単一の階層構造を成していることになる。二点目は、そのような修飾構造の意味表示と統語表示を結びつけるには Jackendoff のそれとは異なる Adjunct Rule が必要になるということである。(1)から(2)を導き出す Adjunct Rule は(21)のようであると推定される：

(21) [_S [_{S_i} ... [[_{PP} on NP_j]]] may correspond to

[_{Event} INCH([_{BE}([_i], [_{ON}([_j])])])]

3. 他の付加詞について

前節においては、反意的付加詞 *on* が概念構造における表示では、統語的に主節として実現される節よりも上位の INCH ([BE (...)]) の関数に含まれることを論じてきた。本節では、並行した分析が場所の付加詞、時の付加詞、結果を表わす付加詞にも適用できることを、明らかにする。

まず、場所の付加詞から取り上げることにする。Jackendoff (1990) では、場所の付加詞は、(20) の様態の付加詞と同様、(22) のような表示をもつとされている：

(22) a. In Paris John went to the Eiffel Tower.

b. $\left[\begin{array}{l} \text{GO}([\text{Thing JOHN}], [\text{Path TO}([\text{Place Eiffel Tower}]])) \\ \text{Event } [\text{Place IN}([\text{Place PARIS}])] \end{array} \right]$

本稿では、(22a) の文は、(23) のように表示されると仮定する：

(23) [State BE_{Posit}([Event JOHN GO TO EIFFEL TOWER], [Place IN([Place PARIS])])]

すなわち、(23) においては、Event である ‘John went to the Eiffel Tower’ を Theme とし、付加詞 ‘in Paris’ を Location としてとる function BE として表わされている。言い換えれば、主節が表わす Event より上位に function BE が存在するということである。この構造を支持する論拠には次のようなものがある。その第一は、様態や道具の付加詞と異なり、文頭に前置できることである：

(24) a. In the garden, John probably lost his wallet.

b. $\left\{ \begin{array}{l} \text{Carelessly,} \\ * \\ \text{With an ice ax,} \end{array} \right\} \text{Max was probably climbing the mountain.}$

また、前置された場所の付加詞の後に、文否定の節も後続しうる：

(25) a. In the garden, John didn't find his wallet but picked someone else's.

b. ^{??}With the knife, John didn't slice the salami but cut his finger.

c. *Carefully, John didn't slice the salami.

(24), (25) が示す事実は、道具や様態の付加詞は、個々の動詞そのものを

修飾しているのに対し、場所の付加詞は、節が表わす Event ないしは State 全体を修飾しているということである。このことはさらに、主節の表わす Event と照応形 (anaphor) との関係で裏付けられる。次の (26), (27) の a で成り立つ先行詞である文と照応形との関係はまさに、(23) の構造が表わしているものである。これに対し、b の様態、道具の付加詞の場合には、そのような関係は成り立たない。

(26) a. A car collided with a truck; the accident was on the freeway.

b. *John climbed the mountain; *the action* was with an ice ax.

(27) a. A Korean Air Lines jumbo jet missing over the Northwest Pacific Ocean was shot down by Soviet fighters. *That* was near a Soviet-held island north of Japan.

b. In the forest, John cut down a big cedar tree.

*That was $\left\{ \begin{array}{l} \text{with an ax.} \\ \text{very careful (carefully).} \end{array} \right.$

三番目の論拠としては、(15) と同じく、場所の付加詞の場合も繰り返しが可能である：

(28) Many people eat in restaurants in London.⁷

以上の場所の付加詞について行なってきた議論は、そのまま時間の付加詞にも適用できる。従って、(29) の a の文の表示は b のようであり、それを支える (24) - (28) に相当する事実は (30) - (34) である⁸：

(29) a. Bill met Mary in 1964.

b. [State BE_{tem}([Event BILL MEET MARY], [Place IN([Time 1964]])])]

(30) In 1964, Bill met Mary.

(31) On Thursday, John didn't go to the exhibition but stayed at home.

(32) John climbed the mountain; *the event* was in 1953.

(33) A Korean Air Lines jumbo jet missing over the Northwest Pacific

Ocean was shot down by Soviet fighters. That was at 3:23 a.m.,
Thursday.

(34) I saw him at nine on Monday.⁹

さて、前節の反意的 *on* が INCH、場所・時間の付加詞が BE を上位の関数として立てることにより表示できることを見てきた。基本的関数のうち残る CAUSE を必要とする関数はあるであろうか。その有力な候補となりうるのは、以下の文におけるような結果表現である：

- (35) a. John hit the ball *into the field*.
 b. Sam beat Harry *into submission*.
 c. John shot Bill *dead*.
 d. John knocked Bill *unconscious*.

(35) の a-d は、それぞれ (36) の a-d のように表示されると思われる：

- (36) a. [Event CAUSE([Event JOHN HIT BALL], [Event GO([Thing BALL],
 [Path TO([Place IN([Thing FIELD])])])])])]
 b. [Event CAUSE([Event SAM BEAT HARRY], [Event GO([Thing HARRY], [Path TO([Place IN([State SUBMISSION])])])])])]
 c. [Event CAUSE([Event JOHN SHOOT BILL], [Event INCH([State BE ([Thing BILL], [Place AT([Property DEAD])])])])])]

これらの詳しい論証は、別の所に譲らなければならないが、次のような論拠によるものである。まず、主節が表わしている Event より上位に function CAUSE を立てることに関しては、(36) の各文は、a の文を例にとると (37) の a, b のようなパラフレーズが可能なることによる：

- (37) a. John's hitting the ball made it go into the field.
 b. John made the ball go into the field by hitting it.

Jackendoff (1990) では、(37b) のパラフレーズを基に、主節の表わす Event を (22) のような LCS の修飾節の部分で、function BY の項として表示している。これに対し本稿では、(37a) のようなパラフレーズを基に (35) のような文を (36) のような構造とした根拠は、(38) に見られるように結果

構文には、無生物の主語を取るものがあるためである。

- (38) a. The rifle shot him dead.
 b. A falling stone struck George dead.

また, Carrier and Randall (forthcoming) においても (39) に見られるような文から, 結果構文の概念構造は (36) のようであるとしている模様である。

- (39) a. It snowed the roads slippery.
 b. It rained the seedlings flat.
 c. It thundered the children awake.

(38), (39) のような場合には, (37a) のようなパラフレーズ成り立つが, (37b) のような *by-phrase* によるものは成り立たない:

- (40) a. *The rifle made him dead by shooting him.
 b. *It made the roads slippery by snowing.

4. 結び

§2 及び §3 において, 反意的付加詞 *on* を出発点として, 時間, 場所の付加詞, 結果を表わす付加詞の概念構造における表示方法に関して, 新しい提案を行なってきた。すなわち, その四種類の付加詞を含む文は, 上位の関数として, 反意的付加詞は INCH-BE, 場所と時間の付加詞は BE, 結果の付加詞は CAUSE の意味素性をとり, 統語的に主動詞で表わされる Event または State と付加詞に相当する構造を同一関数内の項としてとるというものである。これが Jackendoff (1990) の付加詞の取り扱いと対立をなすのは, Jackendoff の場合, このような付加詞は, (20) におけるように, 主要部の LCS 中の従属構造で表示されるのに対し, 本稿での主張では, 単一の階層構造を成しているというものである。

本稿でなされたこれら四種類の副詞類の分析と修飾構造が単一の階層構造をなすという提案は, 今後のさらに十分な論証を経なければならない。しかしながら, このような分析が妥当なものであるとするならば, 反意的付加詞 *on* と経験の *have* との興味深い関係, Jackendoff の分析ではその区

別がなされていない、場所・時間の副詞類と道具・手段の副詞類との意味的振る舞いの相違、副詞類と基本的な関数構造との関係など有意義な一般化を可能にするものである。

[注]

*本稿をまとめるにあたって、Peter Goldsbury 氏, Carol Rinnert 氏にはデータのチェック等に忍耐強くご協力いただいた。また、査読にあたった二人の評者の方には、適切なコメントや助言を頂戴した。これらの方々に、感謝の意を表する次第です。

1) (7)は Menn (1972)に拠る。

2) 逆行代名詞化の現象が Langacker の command の概念による構造的アプローチで説明し尽くされるものではないことは、十分承知しているが、他のアプローチ (Kuno (1972)等の機能的なアプローチや Bickerton (1975)の意味論的アプローチ等)も、構造的説明を覆すまでには至っていないと考える。

3) Inoue (1992)においては、function GO を用いた構造であるとしていた。(8)のような INCH ([BE ...]) を用いた構造に改めた理由は、動詞 *have* が Path 表現ではなく、Place 表現をとること、また、complement として過去分詞をとる *have* 構文では、状態動詞としての読みと、状態変化動詞としての読みの間で容易に交替しうること、の二つからである。

4) 評者の一人より、‘Action tier’を認めないことと関連して、反意的 *on* の構文がもつ affectedness の意味が(2)において、どのように表示されているのか明確ではないという指摘がなされた。もっともな指摘であり紙数が許せば、詳しく論じたいと思った点である。この点に関する筆者の考えは次の様なものである。(2)の構造においては、Theme は ‘John’s car breakdown’ または ‘John’s savings be wiped out’ という Event であり、Location は ‘on John’ である。言い換えれば、これは、「ある John に関係した Event が John の所に存在するようになる」ということを意味する。具体的なものが

物理的な空間に存在するようになる場合と異なり, 抽象的な *Event* が人の所に存在するようになるあるいは, 人の所に来るということは, その *Event* がその人に影響を及ぼしたという意味を生じさせる。次の (i), (ii) の文において, *Event* を表わす *encouragement* と *give, receive* を結合させた時, それぞれ括弧内のパラフレーズの意味になるのは, このためである:

(i) John gave Mary an encouragement to carry out the plan.

(=John encouraged Mary to carry out the plan.)

(ii) Mary received an encouragement to carry out the plan.

(=Mary was encouraged to carry out the plan.)

すなわち, 「*encouragement* という *Event* を Mary の所に在るようにする」または「*encouragement* という *Event* が Mary の所に在ようになる, ないしは来る」ということは, 取りも直さずそれぞれ, 「その *Event* により影響する」, 「その *Event* により影響される」ということを意味する。

また, 反意的意味, あるいは被害の意味が, なぜ, *ON* なのかということに関しては, 以下の (iii) - (v) の *on* に見られる迷惑・被害の意味との共通性を捉えるためである:

(iii) The teacher inflicted punishment *on* the mischievous boy.

(iv) They put *on* him too much annoyance.

(v) He perpetrated a joke *on* his colleagues.

5) (15) は Menn (1972) に拠る。

6) (19) は Menn (1972) に拠る。

7) 共起する場所の付加詞同士には, Quirk & Greenbaum (1973) が記しているように, 制約があり, 右側に起こるものが左側に起こるものを包摂していなければならない。

8) (23), (29) のように上位構造として, 状態の述語 *BE* を立てる時, 起こりうる反論には選択制限に関するものがある。選択制限は, 概念構造において項に対する意味制約として規定される。例えば, (22a), (29a) の文が動詞 *seem* の後に埋め込まれた以下のような文は, 動詞 *go, meet* の非状態性で

はなく、それより上位にあるとされる状態を表わす述語 BE のために、誤って適格な文と見なされてしまう可能性が生じうる：

(i) *John seemed to go to the Eiffel Tower in Paris.

(ii) *Bill seemed to meet Mary in 1964.

このような事態を避けるには、Adjunct Rule により、新たに導入された述語は選択制限が除外されるということにすれば、済むと思われる。本来統語表示で動詞に対応している述語は時制をもち得るという特性(すなわち [+tense])があるのに対し、Adjunct Rule により導入された述語は時制をもたない(すなわち[-tense])のであるから、この特性の違いにより区別できるはずである。

9) 時間の付加詞同士の共起関係についても、6) の場合と同様左側のものが右側のものを包摂していなければならないという制約がある。

REFERENCES

- Bickerton, D. 1975. Some Assertions about Presuppositions about Pronominalizations. Grossman *et al.* eds., *Papers from the Parasession on Functionalism*. Chicago Linguistic Society.
- Carrier, J., and J. Randall(forthcoming). *From Coceptual Structure to Syntax: Projecting from Resultatives*. Foris, Dordrecht.
- Gruber, Jeffrey S. 1965. Studies in Lexical Relations. Doctoral Dissertation, MIT. Reprinted as part of *Lexical Structures in Syntax and Semantics*(1976). North-Holland, Amsterdam.
- Inoue, Kazuko. 1975. Some Speculations on Locative, Possessive and Transitive Constructions. *Sophia Linguistica* 1: 41-60.
- 井上和子. 1992. 受身の *Have* と使役の *Have*. Conference Handbook Nov. 1992: 114-117. English Linguistic Society of Japan.
- Jackendoff, Ray S. 1972. Semantic Interpretation in Generative Grammar.

MIT Press, Cambridge, MA.

Jackendoff, Ray S. 1976. Toward an Explanatory Semantic Representation.

Linguistic Inquiry 7: 89-150.

Jackendoff, Ray S. 1983. *Semantics and Cognition*. MIT Press, Cambridge, MA.

Jackendoff, Ray S. 1990. *Semantic Structures*. MIT Press, Cambridge, MA.

Kuno, Susumu. 1972. Pronominalization, Reflexivization and Direct Discourse. *Linguistic Inquiry* 3: 161-96.

Kuno, Susumu. 1975. Three Perspectives in the Functional Approach to Syntax. Grossman et al. eds., *Papers from the Parasession on Functionalism*. Chicago Linguistic Society.

Menn, Lise. 1972. On Me. *Linguistic Inquiry* 3: 228-233.

Quirk, Randolph and Sydney Greenbaum. 1973. *A University Grammar of English*. London, Longman.

Adversative *On*: An Analysis of Some Adjuncts in Conceptual Semantics

Kazuko INOUE

The purpose of this paper is twofold. One is to present an analysis of the adjunct *on* with an adversative effect as in (1) in terms of the representation of the conceptual structure:

- (1)a. John's car broke down *on him*.
 b. John's savings were wiped out *on him*.

It is proposed that sentences (1a) and (1b) are represented as (2a) and (2b), respectively:

- (2)a. [_{Event} INCH([_{State} BE([_{Event} JOHN_i'S CAR BREAK DOWN],
 [_{Place} ON([_{Thing} JOHN_i])))]])
 b. [_{Event} INCH([_{State} BE([_{Event} JOHN_i'S SAVINGS BE WIPED
 OUT], [_{Place} ON([_{Thing} JOHN_i])))]])

The other is to show that the approach employed in the analysis of adversative *on* can be applied to the semantic description of three other classes of adjuncts.

Section 1 is devoted to a brief survey of the framework upon which the present study is based. The framework basically follows Jackendoff's model(1976, 1983). Section 2 provides evidence that argues for structures (2a) and (2b). The main focus is placed upon the presence of the function INCH-BE in (2) and the relation of adversative *on* to the 'experiential' *have*-sentences such as (3):

- (3)a. John had his car break down.
 b. John had his savings wiped out.

Section 3 argues that in parallel with the *on*-adjunct construction, the constructions of time and place adjuncts require BE and that of resultatives CAUSE, as the superordinate function including the main clause as its

embedded structure, as in the following:

- (4)a. In Paris John went to the Eiffel Tower.
 b. [State BE_{Posit}([Event JOHN GO TO EIFFEL TOWER], [Place IN ([Place PARIS]])])
- (5)a. Bill met Mary in 1964.
 b. [State BE_{tem}([Event BILL MEET MARY], [Place IN([Time 1964]])])
- (6)a. John hit the ball into the field.
 b. [Event CAUSE([Event JOHN HIT BALL], [Event GO([Thing BALL], [Path TO([Place IN([Thing FIELD]])])])])]

If the present analysis is valid, it follows that the constructions of these adjuncts form on the semantic representation a single hierarchical structure, which clearly contrasts with Jackendoff's treatment of the modification structure and that it enables us to obtain the kinds of generalization that we otherwise could not.